



関西ライカ倶楽部

第2回 『ライカの画集』

ドイツのフランクフルトで一九世紀の半ばに創業されたエルンスト・ライツ社（現・ライカ）は、顕微鏡などの光学機器を製造するメーカーだった。一九一〇年、写真撮影が趣味だった技師オス

カー・パルナックが入社し、映画用ロールフィルムを使った小型カメラの試作を開始する。試作機（ウル・ライカ）を基にさらなる開発研究が進められ、一九二五年に最初の市販モデルとなる小型カメラ、ライカI型が発売された。後続のレンズ交換式や距離計を装備するタイプが

一九三〇年代に製造されると、世界中の写真愛好家からその優れた性能が賞賛され、ライカによる手持ちの自由な撮影が写真行為の新たなスタンダードとなっていた。

日本においても発売当初からライカへの関心は高く、プロ・アマ問わず写真家たちにとって憧れの的となった。その後ライカ人気は衰えをみせず、一九三八年七月にはその名もズバリの写真集『ライカの画集』が出版される。編集兼発行者は梶榮之丞、大阪市東区（現・中央



区）を拠点とする関西ライカ倶楽部が発行所である。定価は五円で、丸善大阪支店が大売捌所となった。巻頭に掲げられた「発刊の辞」で編者の梶は次のように述べる。「ライカの傑作ばかりを集めた画集が、日本からも一冊位は出版されてよい時分である。その待望が各方面から集つて来て、到頭私達の手でその第一集を刊行することになりました。／計画を発表したのが此の四月初め、作品の募集期間が約一ヶ月といふライカらしい高速で一気に完成にやつてのけたので、まだ

まだ大きい魚を逸しても居ることです。この写真集の刊行自体が、まこと機動性に秀でたライカのごときスピーディーな出来事であった。

短い募集期間ではあったが、写真集には計百六点の作品が賑々しく掲載されている。京都の家垣鹿之助、神戸の岡本久雄といった関西のアマチュア有力者が名を連ねるが、とりわけ大阪の丹平写真俱樂部のメンバーがずらりと登場していて壮観である。同俱樂部リーダーの安井仲治をはじめ、上田備山、川崎亀太郎、木村勝正、手塚榮といった面々だ。ちなみに手塚榮は漫画家・手塚治虫の父親である。また、東京からは実力のあるプロ写真家たちが参集した。風情あふれる銀座の街並みを撮り続けた師岡宏次、鉄道写真で知られるとともに百冊を超える写真技術書を著した吉川速男、そして日本におけるライカの名手・木村伊兵衛。そんな東京の写真家たちに紛れるように、一

人の日本画家の写真がそつと収められていた。山口蓬春の「冬装」である。

山口蓬春は洗練された独自のスタイルを構築し、「新日本画」の創造に大きな足跡を残した。新しい感性に立脚して描かれた瑞々しい日本画は、蓬春モダニズムとも呼ばれている。掲載作「冬装」については、巻末に撮影データと短いコメントが付されている。「12/11/午後快晴 タンボール9cm」というデータにやや驚く。一九三七（昭和十二）年十一



山口蓬春「冬装」

月に撮影された写真には「タンボール」というレンズが使われていた。それは一九三五年に製造されたもので、ライカのレンズには珍しい幻想的な雰囲気ソフトフォーカス効果が特徴とされる。ただし僅かな本数しか製造されなかったため伝説のレンズと呼ばれ、撮られた作品も稀少とされる。蓬春の写真はその点からも貴重な作例といえるものである。画伯は次のようにコメントしている。「毛皮といふもの、持つあの柔かくふつくりとした感じは、タンボールで写して見ることが一番良さそうに思いました」。すでに画家たちの多くが各種のカメラ機材を手にはしていたが、稀少なレンズを使いこなす蓬春は画家の中でも抜きん出たライカの使い手であったことがうかがえる。神奈川県葉山にある山口蓬春記念館は、画伯が戦後の一九四八年から亡くなる七一年までを過ごした旧邸宅であるが、同館のHPによると「当時売り出さ

れていたこの建物をドイツ製カメラ「ライカ」一式を売却することで手に入れた」とある。戦前期の写真界隈では機材の大層高額な様から「ライカ一台、家一軒」という常套句が流通していたが、なんと終戦後においてもこのフレーズは健在だったのだ。

それではあらためて大判の『ライカの画集』をめくってみる。掲載されている画像をゆっくりと眺めた後、巻末の撮影データを参照していく。するとこの写真集には撮影スポットとして、阪神間にあつた高級リゾートが繰り返し登場していることに気づく。甲子園ホテルである。かつて「東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル」と並び称された施設であり、現在は甲子園会館の名称で武庫川女子大学建築学部のキャンパスとなっている。帝国ホテルの支配人だった林愛作とフランク・ロイド・ライトの愛弟子の建築家・遠藤新が協力して計画を進め、

一九三〇年に竣工・開業と相成った。『婦人之友』同年6月号では、自身が撮影した写真とともに遠藤が「池を隔て、眺めた全景です。／二本の塔が煙突と通風の集団、其中間低い所がバブリックスペースで屋上庭園、塔の外側に累々たる屋根は客室の一団、一番低い大きい屋根が右で食堂、左で宴会」と自作の紹介をしている。また前回登場した『アシヤ写真サロン 1935』には「阪神間第一の健康地」と謳う甲子園ホテルの広告頁があり、ローマ字表記の大きなネオン看板が輝く夜景写真の下端に、「空気清澄。水質卓絶」「八千坪の大池。五千坪の庭園」「室料一名五円以上」「甲子園球場へ二分。阪神パークへ五分」等の案内文が列記されている。

かように甲子園ホテルといえ、大きな池越しに角のような「二本の塔」のある建築が目印の光景なのだが、写真集にはそのような引きで建物の姿を写したも

のではない。兵庫県河原第一「芥子の花」はタイトル通り、池を背景にライカで草花に寄っている。撮影データに場所は示されていないが、作者コメントには「甲子園ホテルの庭園へ天然色の活動写真を写しに行つた序に撮つたもの」とある。また大阪市の富山進「女」は、日本髪を結つたモダン柄の和装女性が池の

端で屈む姿を斜め後ろからスナップしている。その撮影データには「12/5/中旬 於 甲子園ホテル」と明記されている。作者のコメントは「此の時も随分色々と写して見ましたが、結局相手の意識しない処を失敬した此の作品が一番自然に出来ました」とのこと。さらにもう一点、神戸市の前田敏範「語らひ」ではライカのレンズは足元の靴と床に寄っている。この「語らひ」についてのコメントは掲載されていないが、撮影データには「11/6/一晴 於 甲子園ホテル エルマー5cm」とある。「エルマー」は

一九三〇年に製造・発売されたライカレンズの元祖的存在である。

前田敏範の「語らひ」は甲子園ホテルのどのあたりで写されたものだろうか。屋外での自然光による撮影、その特徴的な床タイル、多分に演出的ではあるが床に捨てられたマッチ棒といった画像情報から、そこは屋上庭園の一角だったと推察される。壁際の椅子に女性が座り、撮影者である男性が向かいあつて煙草を嗜んでいる。ライカを所有する裕福なモボとモガの午後のひととき、といったところか。



前田敏範「語らひ」

ろか。彼らに限ったことではないが、洋装・和装を問わず人々はめいっばいお洒落をして甲子園ホテルを訪れていたのである。それにしても写真のモガが履いている白のTストラップパンプスがひととき印象的だ。こうした細部の図像もモダニズムの大切なかけらの一つである。当時のベストセラー『現代猟奇尖端図鑑』（新潮社）には、同様の形状のパンプスを履いたハリウッドモデルたちの写真がたくさん登場している。そこには「二十世紀の流行は、断髪や、ノオ・ストッキングから始まった。身体の先端は、やがて流行の先端だ。上の図を見給へ、擬玉とルビーで目も綾な五百弗のスリッパが体の先端に光つてゐる」といった記述もみられる。パンプスではなく、当時の呼称はスリッパだったのか。このように多くのモボ・モガたちを引き寄せ、ライカで諸所を撮影された甲子園ホテルであったが、大戦末期の一九四四年に営業は停

止となり海軍病院に転用される。さらに終戦後のGHQ占領期には米軍将校宿舎として代用された。

ふたたび巻頭の「発刊の辞」に戻る。「写真画といふものが、そして同時に特に小型カメラに依る作品といふものが、果してどういふ方向に進むべきものであるかといふ問題に付て、此の一冊の画集は、何等かの暗示を鑑賞者に与へるだらうと信じて居ります。／比較的早い時期に引続き第二集を出したい考へであります」と編者の梶は述べた。その翌年、新たに十二点の写真が追加されて、装幀や定価も更新された『ライカの画集「第一集」改訂版』が発行される。だが残念ながら、予告されていた「第二集」の刊行は叶わなかった。戦前期の日本人によるライカ写真のオープンな競演というものを、もう少しばかり写真集というかたちで見てみたかったものである。

（名古屋芸術大学 まつみ・てるひこ）